

インターネット古書店・ほんのたまごミニコミ紙

# miniたま (みにたま)

2018.4第91号

密陀絵箱の藤

日本中が熱狂した2月の冬季オリンピックに続いて、3月の冬季パラリンピックも大いに盛り上がりました。オリンピックでは冬季大会最多となる13個、パラリンピックでも10個のメダルを獲得した日本勢。その活躍を大いにたたえたいと思います。

パラリンピックは、いつごろから行われているのでしょうか。調べてみると、1948年7月28日のロンドンオリンピック開会式と同日に、イギリスのストーク・マンデビル病院で開かれた「ストーク・マンデビル競技大会」がルーツとされます。これは、同病院に入院している患者たちの競技会として、「手術よりスポーツを」の理念で始められたそうです。それが広く国際大会となるのは、1952年から。その8年後の夏季ローマ大会（名称は第9回国際ストーク・マンデビル競技大会）が現在、第1回パラリンピックとされています。ちなみに冬季の第1回とされているのは、1976年のスウェーデンのエーンシェルスピーク大会。このときはまだパラリンピックとは呼ばれていませんでした。

パラリンピックが正式名称となったのは、記憶に新しい1988年の夏季ソウル大会からでした。すでに30年の歴史があるのです。

## ～つげ義春に関する登録在庫のご紹介～

けもの記 つげ忠男漫画傑作集3	つげ忠男	ワイズ出版	¥ 2,800
河童のいる川 つげ忠男漫画傑作集2	つげ忠男	ワイズ出版	¥ 1,500
昭和御詠歌 つげ忠男選集2	つげ忠男	北冬書房	¥ 1,800
つげ忠男読本	つげ忠男、つげ義春、石子順造他	北冬書房	¥ 3,800
つげ義春の温泉	つげ義春	ちくま文庫	¥ 500
つげ義春日記	つげ義春	講談社	¥ 3,000
隣りの女 (となりの女、隣の女)	つげ義春	日本文芸社	¥ 1,000
つげ義春の温泉	つげ義春	ちくま文庫	¥ 600
COMICIぱく1987年春季号	つげ義春、近藤ようこ、つげ忠男他	日本文芸社	¥ 800
別離、くらくら、けもの記、化鳥他			
山野記 風景とくらし叢書2 秋山村逃亡行他	つげ義春他	北冬書房	¥ 1,800
リアリズムの宿 つげ義春「旅」作品集	つげ義春他	双葉社	¥ 800
無能の人・日の戯れ	つげ義春/吉本隆明・解説	新潮文庫	¥ 400
月刊ポエム1977年1月号 特集・つげ義春	つげ義春他	すばる書房	¥ 1,200
シナリオ8月号第54巻第8号	石井輝男、森田芳他	シナリオ作家社	¥ 700
掲載シナリオ・ねじ式、キリコの風景			
「ねじ式」夜話 つげ義春とその周辺	権藤晋	刺麻社	¥ 1,500
ガ口を築いた人々 マンガ30年私史	権藤晋	ほるぷ出版	¥ 1,000
つげ義春を放する	高野慎三	ちくま文庫	¥ 500
「ガ口」COMI漫画名作選1 1964-1970	白土三平他	講談社	¥ 700
つげ義春を読む	清水正	現代書館	¥ 800
つげ義春を読み	清水正	鳥影社	¥ 1,500

すでに売切れの場合がございます。ご了承ください。詳細はサイトをご覧ください。

ほんのたまごは文芸作品や、自然科学・人文・出版・社会・映画などの古書を販売するインターネット古書店です。

# ほんのたまご

著作権は放棄していません  
本紙に掲載されている画像・文章の  
無断転載を禁止します

発行 インターネット古書店 ほんのたまご  
メールアドレス nasuka@hontama.com  
サイト URL <http://www.hontama.com>

# たまたま本の話 第91回 「ねじ式」に登場するアイヌ人 つけ義春

これは、従来のつけ義春研究に一石を投じる労作ではないか。元読売新聞記者の矢崎秀行が書いた「つけ義春『ねじ式』のヒミツ」(2018年1月、響文社刊)である。矢崎は「ねじ式」の初めのほうの5ページ目、「背広姿の黒縁メガネの男性がスパナを持って胡坐(あぐら)をかいている不思議なコマ」を取り上げて、これは「木村伊兵衛(1901~74)の写真『知里高央(たかなか)氏』(1965年)からの引用」だと指摘する。写真と漫画を見比べてみると、確かに構図から何からそっくりだ。スパナは持っていないが、この絵が知里高央(ちり・たかなか、1907~65)をモデルにしていることは疑いない。

知里高央とは誰か。北海道・幌別のアイヌ名門の家柄の教育者である。インターネット資料によれば、「明治40年4月15日生まれ。知里ナミの長男。知里幸恵(ゆきえ)の弟。知里真志保(ましほ)の兄。イギリス人宣教師バチェラー一家の家庭教師、幌別中学などの教師をつとめ、またアイヌ語の語彙研究に従事した。昭和40年8月25日死去。58歳。北海道出身。小樽高商(現小樽商大)卒」とある。

矢崎の指摘は続く。「知里はこの写真が撮られてすぐ、同じ年、1965年に58歳で亡くなっている。その意味ではこの絵の元になった彼の写真は遺影ポートレートとも言えるものだ」「写真が収録された『定本 木村伊兵衛』(朝日新聞社)はずっと後、2002年の発行なので、おそらくつけはこれが発表された『アサヒカメラ1965年7月号』で見ている可能性が高い。彼は自ら写真を撮る漫画家で、一時は中古カメラ屋を開いたほどの写真カメラ愛好家である。写真雑誌には日常的に親しんでいた」。

「ねじ式」は「ガロ」1968年6月臨時増刊号に発表されている。つまり「ねじ式」発表の時点で知里高央はすでに故人であった。とすれば、メクラゲに噛まれて静脈が切断され、切迫した死への恐怖におののく主人公の前にスパナを持って現れる彼は、生の担い手ではなく死の導き手であったということになる。こんな重要な点が50年間も見逃されてきたことに驚くが、インターネット上では数年前から「この絵の元ネタは知里のポートレートではないか」と話題になっていたらしい。しかし「何故いきなりアイヌの名門家系の末裔が脈略もなく突然登場するのだろうか。それも左手に両口スパナを持って」。矢崎の疑問ももつともである。

以下はあくまでも私見である。「ねじ式」は、先行する同じつけ義春の傑作「山椒魚」(「ガロ」1967年5月号)との関連性でとらえられるべき作品ではないか。「山椒魚」を振り返ってみよう。山椒魚は「悪臭と汚物によどんだ穴の中」、つまり下水道に棲んでいる。最後に人間の胎児の屍骸が流れてくるシーンがある。これは不幸にも産み捨てられ、下水道に流されて来てしまった胎児なのだろう。山椒魚と胎児は、単なる行きずりの関係なのだろうか。山椒魚は人間の生まれ変わりなのではないか。胎児は山椒魚の前世の姿なのではないか。そんな思いを強く感じさせる。前世と現世がなぜこの下水道で出会うのか。

今回、この下水道をニライカナイと考えたらどうか、と思いついた。ニライカナイとは遥か遠い東(辰巳の方角)の海の彼方、または海の底、地の底にあるとされる異界のこと。豊穡や生命の源であり、神界でもある。年初にはニライカナイから神がやってきて豊穡をもたらし、年末にはまた帰るとされている。また、生者の魂もニライカナイから来て、死者の魂はニライカナイに去ると考えられている。ニライカナイ信仰は、沖縄県や鹿児島県奄美群島の各地において伝統的な民間信仰である。

「山椒魚」において、胎児は下水道にやってきた。つまりニライカナイに来た死者の魂である。その胎児と遭遇した山椒魚は、ニライカナイで生まれ変わった生者の魂であろう。最後、背を向けて泳いでいく山椒魚の姿は象徴的である。そう考えると、この下水道は決して不吉な空間でなく、神と輪廻と転生の神界であるということが分かる。そしてそこには永遠の時間が流れている。

この神界ニライカナイのイメージが、聖地アフルパルに転換したのが「ねじ式」という作品だったのではないかと、思うのだ。アフルパルとは何か。沖縄とアイヌは民族的に同じルーツを持つとされる。ニライカナイに似た概念として、アフルパルと呼ばれる聖地が沖縄にもある。アフルパルは「入る道の口」の義。あの世への入口。多くは海岸または河岸の洞穴であるが、波打際近くの海中にあって干潮の際に現れる岩穴であることもあり、また地上に深く掘った人口の堅穴であることもある。この解説を「地名アイヌ語小辞典」で書いているのは、他ならぬ知里高央の実弟で、アイヌ初の北海道大学教授になった知里真志保である。そして形状的にアフルパルは、窪地状でありねじ溝状であるケースが多い。まさに「ねじ式」聖地だ。これは詩人の吉増剛造も指摘しているという。

「ねじ式」では、最初のコマから、主人公はメクラゲに左腕を噛まれて静脈が切断されている。つまり下水道でゆつたりと泳ぐ山椒魚と違って、切迫する死への恐怖の中で、少年は医者を探すことを必然づけられている。「山椒魚」では永遠であったはずの時間が、「ねじ式」では限定された時間に転化している。山椒魚が背を向けて去っていったのとは対照的に、少年は海からこちらに顔を向けてやってくる。「ねじ式」における彼は、あの世への入口に足を踏み入れたのだ。だから死からの生還をねじに委ねざるを得なかった。そうは考えられないだろうか。(こや)